

「絶望」を語る犯罪者を語る

加害者性と被害者性をめぐって

加瀬 佳代子

“連続射殺魔” 永山則夫の語り

「語ること」をテーマにした本発表では、比較文学研究の観点から、“連続射殺魔” 永山則夫の加害者性が、被害者性と地続きであり、その内なる相克が、永山の小説執筆の基底にあったことを論じた。そこで、読み手のまなざしが問題となるのだが、彼らは相互対立的な加害者性／被害者性に引きずられ、いずれかの視点から永山の作品を読むと、その観点から永山を語り、“連続射殺魔”を再構成してきた。永山の語りをめぐる語りについても考察した。

19歳で4人の人間を殺した作家、永山則夫は紛れもなく加害者だ。その事実を十全に背負った永山は、自ら“連続射殺魔”と名乗っていた。しかし、彼が抱えていたのは「加害者性」だけではない。同じくらい凄絶な「被害者性」も彼は有していた。

1949年、永山は網走の極貧家庭に生まれた。永山家では、賭博狂いの父親に代わり、母親が行商で家計を支え、長姉が幼い子どもたちの面倒を見ていた。しかし、望まぬ妊娠、中絶で長姉が精神を病むと、母親は幼い兄弟を捨てる。永山が5歳の時のことだった。ごみ箱を漁って飢えを凌ぎ、兄の虐待に耐え、永山は網走の冬を生き延びた。1年後、母親のもとに引き取られるが、貧しさに変わりはなく、中学校卒業後は「金の卵」として上京した。しかし、生活は安定せず、転職、放浪、密航と漂泊の青年期を過ごした後、永山は「理由なき殺人」を犯す。そうして辿り着いた監獄で、永山は新境地を開拓した。書き方を学んだ後、猛烈な勢いで書き始めた永山は、『無知の涙』など5冊を出版した後、小説『木橋』を発表、新日本文学賞を受賞した。

永山の語りは、それ自体が加害者性／被害者性の間を揺れる。その揺れは、自己の語りから社会学の語り、そして文学の語りへと、領域が広がるのにあわせて、振れ幅を増した。例えば、処女作『無知の涙』の前半は、加害者永山の苦悶の語りを中心となっている。そこでは、「囚人は人間ではないというが、人間でないということはない」が、「獣か、犬にでもなれたら」（永山 2015 74）という加害者の絶望の語り繰り返される。

しかし、ファノンの『黒い皮膚、白い仮面』を読んだことで、永山の語りは変わった。「ニグロと、資本主義下における貧乏人である自分」は「同じ被抑圧者、被搾取者」（永山 2015 485）なのだ、自己の被害者性を発見すると、己の被害者性を視野に入れ、社会学のことばで語り始めるのだ。そして、ついには独自の理論を組み立て、「驚産党宣言」なるものを発表するに至る。「ルンペン・プロレタリアートと市民大衆が共に生きる道」の探求を目的とするその運動は、「生きざまさらし」—自身の価値観を認識、反省するために人生をあからさまに語る—を活動の中心とした。集まった支援者とともに、「ルン・プロ」を排除する「市民」に、自身の加害者性を認識させる「反省-共立運動」を展開すべく、獄中の永山は書き続けた。

この頃の永山の語りは、扇動的な社会学のことばで埋め尽くされている。だが、永山が自己の語りの領域を放棄したわけではない。批評家の井口時男は、永山の語りは闘争の主体である「私」と、主体化されない「ぼく」に分裂しているという。同様のことは、彼の担当弁護士大谷恭子も指摘しており、「永山君は激しく論理で責め立てるが、論理の武装を解いたとたん、小さい男の子のようで」、「攻撃と求愛が同居していた」（大谷 2010 25）と述べる。「論理武装し、攻撃する私」と「小さい男の子のように求愛するぼく」は、彼の加害者性と被害者性と重なる。井口と大谷は、それを「分裂」としてとらえるが、そうすると、永山の複数の語りは加害者の語りと被害者の語りに腑分けされ、両者を合装することはできないということになる。

さらに言えば、強烈な加害者性と被害者性を突きつけてくる永山の著作は、一律の読みを許さない。読み手は、永山の加害者性／被害者性に振り回されてしまうのだ。例えば、劇作家の寺山修司は、連続殺人事件の直後から永山に関心を寄せ、『幸福論』では「脱出」を合言葉に、永山との同一化をはかっていた。だが、永山が思想を語り始めると態度を一変、被害者性を強調するための創作だと断じると、永山を強く非難した。

同様のことは、小説家中上健次にも見られる。事件直後から永山に同情的だった中上は、「他者ともつにせの関係を見出し、それを真に拒もうとする時、必然的にあなたは暴力（犯罪）か、自殺か、宗教か、発狂か、あるいは書くことかという手段をえらばなければならない」（中上 1978 125）と、永山の犯罪から普遍的人間性を嗅ぎ取ると、「書くこと」と「犯罪」を同一線上に並べ、自己を永山と同一化した。しかし、後に中上も「その論法は、永山が敵だという市民社会の論法」であると、永山の著述を「獄中で書き続ける言葉のクズ、カス、生ゴミ」（中上 1978 142）とこき下ろした。中上は、永山の語りに潜む加害者性に反応したのだ。

小説「木橋」と加害者性／被害者性

1980年、永山は獄中結婚する。当初は喜んでいて永山だが、自分の思想を理解しない妻と諍いを繰り返すようになる。そこで彼女が言った、「もっと解りやすい言葉で話せば、みんな思想を分かってくれるよ」(嵯峨 218)ということばをきっかけに、彼は小説を書き始めた。そこで書かれた小説「木橋」は、永山の「生きざまさらし」に他ならない。永山は主人公のN少年に、自身の網走時代を再演させ、自身の被害者性を曝け出した。

「反省-共立運動」の支援者の武田和夫は、幾度となく永山から、その物語を聴いていた。そのため彼は、永山がこの物語を書いたのはカタルシスではなく、カタルシスしたことを書いたのだとみなす。そして、その後には同情を集め、無罪を勝ち取ろうという弁護方針があり、戦略的に被害者性が前景化されたのだと語る。

実際、大谷弁護士は、この小説は「ミミ(妻)の誠実な人柄が、永山の人類に対する抽象的な愛を、具体的な人間に対するものに変えた」(大谷 1999 100) 結果なのだと、二人の愛の物語に落とし込み、「愛されている者は生きなければならない」(大谷 1999 113) と結ぶ。彼女が小説を評価するのは、読み書きできなかった少年が作家に成長したからであり、リテラシーの習得を加害者永山の贖罪とする。

その思惑通り、新日本文学賞の審査員は、永山の被害者性に目を奪われた。彼らは思想を語る永山を否定するが、悲惨で抒情的な小説は称賛した。自分たちを責め立てる加害者永山は気に入らないが、哀れな被害者の永山には、心を動かされたというのだ。

こうして小説の領域に及んだ永山の語りについて、井口は「作者が小説をどのように意味づけ、どのように利用しようと目論もうが、小説は小説自身の論理と力をもって作者自身を変容」(井口 124) させると懸念した。その懸念は、いわゆる文芸家協会入会問題として出現する。永山自身は、早々に協会から距離を置いたが、騒動は止まなかった。犯罪者と小説家は紙一重であると、筒井康隆や陽羅義光は永山の加害者性を共有し、永山の入会を当然のこととした。他方、中上は、獄中の永山を「弱者」と位置づけ、入会に反対する作家たちは「さながら自分が法律や国家の中にあるような言い方で、永山則夫の犯罪を誹謗した」(中上 1996 205) と、無自覚な加害者性を指摘した。

入会問題を総括したのが絳秀実だが、そこで絳が提起したのは、現代小説の核心的問題だった。絳は、文学が持つファシズムとの親和性を指摘すると、往々にして文学は「精神の讃歌」となり、差異を崩壊させる役割を果たすと、その危険性を訴えた。そして、今回問われているのは、この「精神の讃歌」としての文学なのだと問題を文学の枠内に置きなおした。入会問題では、永山の作品が優れているかどうか議論の的となったが、それはメディアが設定した言説の布置にすぎないと絳は指摘する。永山の小説を認めるにしろ、否定するにしろ、それは言説の布置に従っただけのことで、そこで生じる囲い込みこそ、文学的ファシズムだというのだ。

さらに絳は、賛成派は永山のリアリズムを認めるが、それでいいのかと問いかけた。絳によれば、永山の小説は、今や少女雑誌でも見かけなくなった、ナイーブな抒情詩であり、それを前にして「恥知らず」とさえ言えないのは、「疚しい良心」のためだと批判した。その見方に従えば、永山の作品は、読み手の「疚しい良心」を癒やしつつ、ファシズムを喚起するものだということになる。だからこそ、この問題は、入会申請という「事件」の文学化として問われるべきだと、絳は語る。

すがの文学論を、全面的に否定することはできまい。この論を読んだ中上も、自分は永山の作品を持ち上げるつもりはないが、入会を拒否する行為も、推進する人々も、「精神の讃歌」としての文学をふりかざし、そこにすっぽりはまり込みかかっていると納得している。しかし、焦点を永山の語りに戻せば、新たな問題が見えてくる。文学は永山の語りをその領域内に閉じ込め、開かれていた社会への通路を閉じてしまった。

【参考文献】

井口時男『少年殺人者考』講談社、2011。

大谷恭子『死刑事件弁護士—永山則夫とともに』悠々社、1999。

嵯峨仁朗『死刑囚 永山則夫の花嫁—「奇跡」を生んだ461通の往復書簡』柏艚社、2017。

絳秀実 「現代小説の布置—「永山則夫問題」の資格から」『群像』8月号、1990、190-224。

武田和男『死者はまた闘う—永山則夫裁判の真相と死刑制度』明石書店、2007。

寺山修司『幸福論』角川書店、1972、1993。

中上健次『鳥のように獣のように』角川文庫、1978。

—— 「変質した文芸協会」『すばる』7月号、1990、187-188。

永山則夫『無知の涙』河出書房新社、1990、2015。

—— 『反-寺山修司論《復刻版》』アルファベータブックス、2017。

—— 『木橋』河出書房新社、1990。